

聾学校における児童生徒のセルフアドボカシーの力を育てる取組

～小学部と中学部の児童生徒の発達段階と学部間連携を踏まえた指導実践～

数馬 梨恵子・川上 綾子

本校小学部・中学部の児童生徒は、聴覚を積極的に活用し、音声言語を主体にコミュニケーションをとっているため、学校の中では聴覚障害による困った経験や不便さを感じる事が少ない。しかし、将来を見据えた際、自己の障害を正しく受容、理解し、さらには他者に説明するセルフアドボカシースキルを高めていくことが必要となる。本稿では、小・中学部の児童生徒の発達段階に合わせて様々な場を設定しながら、児童生徒自身がセルフアドボカシースキルを身に付けていくための指導実践についてまとめ、報告する。

キー・ワード：自立活動 コミュニケーション セルフアドボカシー

1 はじめに

改正障害者差別解消法が2024年4月に施行され、障害者を取り巻く周囲の環境における合理的配慮が義務化された。このことにより、聴覚に障害がある児童生徒にも、自己の障害について理解し、他者に説明する力（セルフアドボカシースキル）がより一層求められるようになった。

本校には、聴覚を積極的に活用し、音声言語を主体にコミュニケーションをとっている生徒が多い。また、特別支援学校（聴覚障害）（以下、聾学校）という聴覚障害に配慮された環境で生活しているため、日常的に困った経験をする事が少ない。そのことにより、自己の障害を正しく受容できなかったり、支援の必要性を感じていなかったりする児童生徒もいる。しかし、中学生になると、聴覚障害の有無にかかわらず、様々な人との関わりが増えていく中で、自分で工夫してコミュニケーションを取らなければならない場面が増えていく。そこで、生徒が自身の障害を受け止め、理解した上で、他者に説明する場の設定や、そこに向けた準備等の指導が必要となる。生徒が自身の障害をしっかりと受け止めた上で、自己肯定感を高めていくことが中学部段階では重要であると考え、小学部段階の取組も関係すると考えた。そこで、小・中の各学部において自己の障害理解に関する実践を行うとともに、学部間の継続性を意識した実践や引き継ぎの方法について検討する

ことにした。

2 研究目的・方法

(1) 目的

聴覚を積極的に活用し、音声言語を主体としてコミュニケーションをとっている児童生徒のセルフアドボカシースキルを高める実践を重ね、小・中の学部間の指導の継続性を意識した実践や引き継ぎの方法について検討する。

(2) 方法

小学部の児童には、聴覚障害の程度だけでなく、発達段階上、経験の少なさや語彙の未熟さがあるため、自立活動の時間を中心として教師が先導しながら自己理解の場を設定した。

中学部の生徒には、自立活動の授業だけでなく、教科指導や部活動等、様々な活動の場面で生徒自身にコミュニケーション手段や必要な支援を考え、選択させる経験を通して、セルフアドボカシースキルを高めていくことができると考え、様々な場を設定した。また、中学部生徒による自己の障害に関する振り返り（小学部から現在まで）を通して学部間の継続性を意識した実践や小学部から中学部に引き継いでいく方法を検討した。

3 指導の実践

セルフアドボカシースキルを身に付けるにはどのような力を児童・生徒に身に付けてほしいかを考え、指導の中で3本の柱を立てることにした。自己理解

2 聾学校における児童生徒のセルフアドボカシーの力を育てる取組

力・伝える力・そして、状況判断力である。この3つの力を身に付けることがセルフアドボカシースキルにつながると考え、実践を重ねた。

(1) 自己理解力を培う取組

①小学部の取組

本校小学部の児童は、音声によるコミュニケーションを基本にしながら、必要に応じて音韻サインを活用して学校生活を送っている。令和6年度の人工内耳装用児の割合は58.9%であり、ここ数年60%前後を維持している。発音が明瞭な児童も多く、学校生活の中では「聞こえない・聞こえにくい」と感じる場面が少ない。そのため、まずは自己理解の場を設けることが大切であると考え、自分の性格や趣味、好きな学習等と併せて、自分の聞こえについて考え、言葉にする機会を設けた。自分の性格についての学習は導入段階で行い、「自分はのんびりタイプかせっかちタイプか」のように2択問題にして児童がリラックスできるよう配慮した。その後、聴覚障害について扱い、聞こえの仕組みについても丁寧に指導した。

聴覚障害に関する理解を深める指導で「難聴は分かりにくい障害である」ということを特に丁寧に扱った。話し合い活動を通して、周りの人から補聴器や人工内耳を装用しているから聞こえている、明瞭に話せているから聞こえていると周りの人から思われたりしてしまう経験をしたことのある児童がいることが明らかになった。難聴があっても一人一人自分らしく生きる権利がある、ということを伝え、自分のことを大切にしてほしいと願いながら指導にあたった。

②中学部の取組

中学部では自身の聞こえの状態の理解から、様々な音や聴覚障害全般について様々なことを話題に取り上げ、生徒の世界を広げることを意識しながら指導した。

【聴力測定】

本校では、学級担任が年に1回以上聴力測定を実施している。測定実施後には、生徒と一緒にオーディオグラムを見ながら本人が自身の聞こえについて客

観的に見ることを意識して話をするようにしている。確認するポイントは以下の通りである。

- ・裸耳と装用耳の聞こえを前年度のオーディオグラムと比較し、聞こえ方に変動がないかを確認する。
- ・聞こえに左右差があったり、低音域と高音域の聴力に差があったりする生徒には、自身の聞こえ方とオーディオグラムに大きな相違がないかを確認する。
- ・家庭での補聴機器の装用状況について確認をする。生徒と話をする際は、なぜ外すのか、どういう時に外しているのか、生徒自身に理由を尋ね、丁寧に確認をするようにしている。中学生になると、装用時間が減る生徒もいるが、外す時間が増えれば増えるほど、補聴機器の装用効果も変化していくことを伝えている。補聴機器の装用に関しては本人に選択の権利があると考えているが、中学生という発達段階から、将来的にコミュニケーション手段の選択肢を残していくことの大切さを伝えるようにしている。また、補聴機器の装用状況については保護者とも面談等で共有するようにした。

【コミュニケーション手段について】

中学生になると、本校小学部から進学した生徒に加え、他の聾学校や地域の小学校からも生徒が入学する。つまり、コミュニケーション手段の異なる生徒集団が作られる。中学部では音声によるコミュニケーションを主としながら手話・指文字を併用するため、小学部で使用していた音韻サインは中学部に入学すると徐々に使用しなくなる。こういった集団の特性を踏まえ、中学部入学時に様々なコミュニケーション手段について授業で扱った。高度・重度難聴児で小学生の時に音韻サインを主として活用していた生徒の中には、外部から入学した生徒とのコミュニケーションに時間を要した生徒もいたが、お互いに歩み寄りながらコミュニケーションが取れるようになっていった。中学2年次にはほとんどの生徒が音声に指文字や手話を併用するようになった。音韻サインから指文字に移行したことについての生徒の感想は次の通りである。

- ・音声聞き取れなかった時に指文字・手話がある

と、よりイメージもわいて分かりやすい。

- ・マスクを着用しての会話の際に、指文字・手話が身に付いていたことで、コミュニケーションが取りやすくなった。
- ・時と場合、また、相手によってコミュニケーション手段を使い分けることができるようになった。

【環境を整える】

生徒が自身の聞こえについて理解し、クラスの学習環境に慣れてきたら、席替えは生徒に話し合わせながら行った。聴覚を活用している生徒は自分が聞き取りやすい耳はどちらなのか、手話メインの生徒は全体を見渡せる席はどこなのか…等、生徒本人がクラスメートに伝える場を作り、クラス全体で相談しながら席を決めていった。中学生になると、仲の良い友達の隣が良い等、様々な希望が出ることもあるが、まずは「授業を受けるにあたり負担なく聞く／見ることのできる席かどうか」を優先させた。席替えをきっかけとして、自身の聞こえや情報の取り方について考え、言葉にして他者に伝える良い機会となった。また、仲間一人ひとりの主とするコミュニケーション手段について知るきっかけにもなった。社会に出ると、講演会、会議、会食等、状況に合わせて「聞きやすい／見やすい場所」を自身で選択していく場面が増える。その時に席替えの経験が活きていくと考える。

【身の周りの音について】

聾学校の学習環境は比較的静かで、教室内の教師や仲間の声が聞き取りやすい環境が整えられている。ただし、身の周りには様々な音があふれており、身の周りの音を知り、自分が発している音の大きさや相手を不快にさせる音に関して理解を深めることは重要である。授業中、遠くで雷鳴が聞こえたり、ヘリコプターが近付いたりする音に生徒が反応する場合もある。そんな時は窓へ近寄り、空の色を見て「雨が降りそう」と確認したり、ヘリコプターが飛び去るのを見届けたりした。聞こえている音とその音を発している物や現象を確認することで、音への気付きを促し、音を知ることが目的である。

聴覚障害のある生徒は周りの音に敏感であっても

自身が発する音に鈍感な場合がある。そのうちの1つが教室で椅子を引くときに生じる床と椅子の足がこすれる大きな音である。授業の開始・終了時に大勢が同時に椅子を引くとかかなりの大きさの音となるため、聾学校の小学部や難聴児が在籍している地域の小学校ではテニスボールを椅子の足にはめる対応をしている学校もある。ただし、中学生になっても音が出ない環境を教師が整えてしまうと、生徒は自分が発している音に気付かず、音に気を付ける意識を育む機会を失ってしまう。聴者にとっては大きな音であり、不快に感じる人もいること、また、マナーとして椅子の出し入れをするときには椅子をもち上げて音が出ないように周りを気遣うよう、日頃から指導した。他にも、ボールペンのペン先をカチカチと出し入れする音や、教科書やカバン等を机に乱暴に置いた時の音、食事をしている時の咀嚼音等に生徒は気付きにくい。聞こえないから知らない、ではなく、音のマナーにも気を遣えるよう、指導した。

【アイデンティティについて】

本校中学部の生徒の多くが、幼稚部または小学部から本校に在籍しており、また、国立大学附属校ということもあって他の聾学校や聴覚障害のある方との関わりが少ない。そこで授業中だけでなく、昼食の時間や休み時間等、聴覚障害に関する様々なことを話題にし、聴覚障害全般に関して、興味をもち、知ることができるようにした。2022年冬、フジテレビで放映された「サイレント」というドラマが話題になった。そのことをきっかけに、「ドラマの中の聞こえない人はなぜ声を出さない人が多いのだろう。」「難聴者というよりはろう者のイメージだよね。」という生徒の声が聞かれた。

近年、各都道府県における手話言語条例の制定、オリンピック開閉会式のろう通訳、そして、様々な映画・ドラマの影響もあり、「ろう者」や「手話」が世間一般により身近になってきている。生活の中でもコンビニ等での指差しボードやテレビ、YouTube動画の字幕の普及等、聴覚障害者に配慮した環境もかなり整ってきている。これまでもメディアで聴覚障害が話題になることやドラマに聴覚障害者が登

4 聾学校における児童生徒のセルフアドボカシーの力を育てる取組

場することはあったが、改めて振り返ってみるとドラマに登場する聴覚障害者は手話を使用し、声を出さない演出がなされていることが多い。普段から聴覚を活用し、音声言語でコミュニケーションを取っている本校の生徒はこのことに違和感を覚えたようだ。全国に聴覚障害者は15000人程度いると言われていたが、世間のイメージする聴覚障害者は「手話を使う人」「声を出さない人」なのかもしれない。そう考えると聴覚を活用し、音声言語でのコミュニケーションを主とする本校の生徒は世間のイメージする聴覚障害者と遠いところにいるのかもしれない、とより強く考えるようになった。

自立活動の授業で生徒に【聴覚障害者、難聴者、中途失聴者、ろう者（デフ）】の言葉のうち、自分自身を表す言葉として最もしっくりとくる表現はどれか、と尋ねた。中学生の間にアイデンティティが確立し始める生徒もいるが、中には、「考えたこともなかった」や「どれも何か違うかな？」と答える生徒もいた。どれかにあてはまらなければならないのではなく、言葉に触れたり、情報を提供したりすることで、生徒が将来的に自分のアイデンティティを形成するきっかけづくりになれば、と考えた。将来、「聞こえないんだ。じゃあ手話でコミュニケーションを取るんだね!」と周りの人から言われた時に、難聴の程度が軽中等度の生徒や発音が明瞭で音声言語を主としてコミュニケーションを取る生徒こそ丁寧に説明できる力が必要になると考える。だからこそ自己理解を深め、自分のことをよりの確に、より丁寧に説明できる力を身に付けなければならない。権利だから支援してもらって当たり前と考えるのではなく、必要かつ可能な支援を考える力、それを依頼できるコミュニケーション力、そして最も重要なのは周りからサポートしたい、サポートできてよかったと思ってもらえる人間関係を築く力を身に付けることだと考える。こういった「セルフアドボカシースキル」を身に付けて卒業させたいと願い、聴覚障害に関する話題を多く取り上げるよう、心掛けた。

【自分の学校や他の聾学校について】

日本唯一の国立大学附属の聾学校ということで、

本校は都道府県立の聾学校と比べると聾学校同士の横のつながりが少ない。特にコロナ禍で聾学校体育連盟主催の各種大会が開催されなかった時期は、学校以外の聴覚障害者に会う機会が著しく減った。そこで、まずは本校の歴史を知り、本校がどういった役割をもつ聾学校なのかを知るため、総合的な学習の時間で調べ学習を行い、文化祭で展示発表を行った。そして、その後には日本にある公立、私立の聾学校や特色ある教育活動を行っている聾学校について知る機会を設けた。その結果、全国の聾学校では、人工内耳装用児が増加し、児童・生徒数が減っているという現状にあることを学ぶことができた。

(2) 伝える力を培う取組

①小学部の取組

小学部では遠方の小規模校とのオンライン交流や地域の小学校との給食交流等を行っている。その時の経験をもとに話が分かりにくかった時のお願いの仕方について話し合うと、次のような意見が出された。

- ・紙やホワイトボードに書いて、と伝える。
- ・私の右隣に来てほしい、と伝える。
- ・ロジャーを持って来て、付けてもらう。

聞こえにくさをオープンに話し合える場を設定できたことで、児童の自己理解が進み、自分の障害についても前向きに捉えることができた。

②中学部の取組

中学部では、2年生で実施した職場体験の際、自身の聞こえについて実際に説明し、支援をお願いする経験をした。職場体験へ行く前に「自分の聞こえの状態とお願いしたい配慮について簡潔に伝える」にはどのよ

令和5年1月13日（金）

職場体験①自己紹介カード作成準備！

2年 組 番

■職場体験先のように自分のことを知らない人がいる場合は、最初に必ず自己紹介をする必要があります。自分はどうなるかを説明し、聞いて貰って貰うのが大切です！

①自分の好きなことを書こう！

②自分の得意なことを書こう！

③友達から見た自分の「良いところ」をコメントしてもらおう！しにいこう！

④自分はどんな性格かを書こう！

⑤初めて会う人に自分のことを説明するとき、自分の「聞こえ」の状況をどのように説明し、どんなところに配慮してもらえたらいいかをコミュニケーションがスムーズになるかを書こう！

Fig.1 自己紹介カード作成 事前プリント

うにしたらいいか、学年全体で考える時間をもった。

その中で出てきたのが「ゆっくり、はっきり、大きな声で話してください。」というお願いの方法である。小学部では、このようにお願いをする例を提示したことがあり、中学部の生徒からも「よく耳にする例だね」や「自分もこうやってお願いしたことがある」という声が聞かれた。しかし、そこで話題になったのが「聴覚障害者と接したことのない人にとって、この説明は果たして分かりやすいのか」ということだった。「ゆっくりって言うとうそいゆっくり言う人もいるけど、かえって分かりにくいよね」や、「文節で区切ってもらえると分かりやすいよね」と、生徒が各々の経験を語りだした。ただし、様々な意見が出る中で、「何をどこまでお願いしてよいのだろうか。」「お願いばかりになってしまって失礼になるのではないか。」と気にする生徒も出てきた。安全に職場体験をするには必要な支援は求めたいが、相手の立場に立って考えたときの難しさに生徒自身が気付くことのできた貴重な話し合いの機会となった。

また、職場体験ということもあり、職場によってはマスクを着用している場合があるかもしれない、保育園だったら子どもにこの説明は通用しないかもしれない等、自分の体験先の状況を想像しながら考える生徒の声も聞かれた。様々な場面や相手の状況を想定しながら判断してお願いができると良い、ということを全体で確認し、自己紹介カードにはそれぞれの「お願い」を書くことができた。実際に生徒が書いたものには下記のようなものがあつた。

- ・左耳で音を聞き取っています。静かな場所の方がはっきりと聞き取れます。
- ・筆談してくださると嬉しいです。私が話す時も伝わらない事が多いので、筆談で伝えたいです。

職場体験学習 自己紹介カード		【体験先：】
氏名		
学校名		
学年・学級	〒	【郵便番号】
住所		
電話番号		
氏名		
職名・役職		
勤務先		

Fig. 1 自己紹介カード

職場体験の事前あいさつでは、自己紹介カードに

記載した体験先の方をお願いしたい配慮について実際に伝える場面を設定した。初めは遠慮がちに伝えていた生徒たちだったが、実際に体験が始まると状況に合わせて配慮を求める姿も見られた。話が分からなかったときに「もう一度お願いします」と言い出せず、表情に出すだけで終わってしまっていた生徒に初めは体験先の方が気付き、声をかけてくださったことで分からなかったことを伝えられた場面もあった。あとから生徒に話を聞くと話を遮ってよいのかと戸惑ってしまった、とのことだった。体験先の方がきっかけを作ってくくださったことで、どのタイミングで聞き返せば良いのか、経験を通して少しずつ生徒は学んでいくことができた。また、動きながら話をされて、口元が見えなくなったり、口元と手元等、見なければならぬ視点が複数になったりする場面もあった。その都度、言葉を選びながら自分で伝えようとする生徒の姿には大きな成長を感じることができた。また、聴覚を活用して情報を得ている生徒も、動きの多い体験先では、音声だけでなく、視覚的に情報を得ることの大切さに気付くことができ、経験を通して情報を得ることの難しさ、また、様々な情報を得る方法を会得することができた。

(3) 状況判断力を培う取組

①小学部の取組

小学部では、オンライン交流や給食交流の場面で状況に合わせながら児童がコミュニケーションを取ろうとする姿が見られた。

オンライン交流では、機械を通しての音声聞き取りにくくなる。すると、「分からなかったので、もう1度言ってください。」それでも分からなかったら、「紙やホワイトボードに書いてください、と言う。」と判断する姿が見られた。また、授業で振り返りを行った際には、聞こえる友達と遊ぶ時に「右隣に座ってほしい」「ロッジャーを付けてほしい」「校庭で遊んでいる時は、砂に書いてもらう」等、状況に合わせて工夫している話も聞かれた。

②中学部の取組

中学部では、校外や校内の様々な場面で状況に合

6 聾学校における児童生徒のセルフアドボカシーの力を育てる取組

わせてコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿が見られた。

【職場体験】

職場体験では、生徒の見る視点が話者の手元と口元の2つになると情報を正しく得ることが難しくなるということを多くの生徒が体験を通して感じた。例えば、図書館で体験をした生徒は、図書の貸し出し業務でパソコン操作をする際、職員の方がパソコンの画面を見ながら説明をされる時があった。パソコンの画面を見ていないと指示語が何を指しているのか分からないが、口元を見ないと話している内容を正しく理解できない。話を聞き取れなかった時にどうしても聞き返すことが多くなってしまい、今はどちらを見るべきか、状況を見ながら視線を動かして情報を得ようとする姿が見られた。それでも分からない時に、生徒が職員の方にパソコンの画面の近くに移動してほしい旨を伝え、パソコンの画面と話者の口元が生徒の視界に収まるようにしたことで、2つの見る視点がまとまり、話を理解しやすくなった。また、銭湯での体験では、ボイラー室で説明を聞く際、ボイラーの音が大きく、体験先の方の話を聞きとれなかった。そこで、生徒が筆談を依頼し、筆談で説明を受けることができた。このように状況に合わせ、相手が可能な対応を依頼することでコミュニケーションが取りやすくなる、ということを経験することができた。

【映画制作】

コロナ禍で文化祭における舞台発表が行えなくなった際、例年高校生が行っている映画制作に自分たちもチャレンジしたいという意見が挙がった。映画に字幕を挿入する作業は、動画の音声を聞きながら行うため、自主的に軽度難聴の生徒が立候補し、中心となって作業を行っていた。また、全体を通しての音量調整は教師に依頼する等、自己理解をした上で、動画制作を進めることができた。

【部活動】

バレーボール部の練習試合では、各チームのキャプテン同士が試合開始時刻等を相談して決めることが多い。教師が仲介せず生徒に任せてみると、コミ

ュニケーションを不安に思っただけで軽度難聴の仲間を連れて相手との交渉に行く生徒、時計を見ながら話ができるように時計を持って交渉に行く生徒等、各自工夫をする姿が見られた。また、数字を表す際も指文字ではなく、ジェスチャーで伝える等、騒がしい体育館でも短時間で相談ができるように工夫する姿が見られた。地域の学校と練習試合をしたり、地域の学校が参加する大会に本校も出場したりすることで、地域の学校の生徒にとっても「聴覚障害者」「手話通訳者」が見たことのある身近な存在となる。すると、地域の学校の生徒が自ら手話のあいさつを調べて、本校の生徒に手話であいさつをしてくれる場面を目にすることが増えてきた。また、練習試合で生徒が審判をしている時に、本校の生徒が手話で話をした後、視線が審判に向くまで待ってから笛を吹く場面も見られた。

近年は、聾学校全体の生徒数が減少しているため、学年によっては単独でチームを組めない場合がある。単独でチームを組めない時は、地域の中学校と連合チームを組み、大会に出場している。連合チームを組んだ当初はお互いに距離があり、それぞれの学校の生徒同士で固まっていたコミュニケーションも遠慮がちだった。しかし、試合に勝ちたいという共通の目標が生まれると、教員を介さず、自分たちでコミュニケーションを取らなければならない場面が出てくる。時間が限られている試合間に生徒同士でミーティングをした時には、どうしても早口になったり、話者が複数になったりして話が分かりづらくなってしまいう場面があった。本校の生徒が「もう少しゆっくり話してほしい」と伝え、相手校の生徒が話すスピードを緩め、お互いに理解し合っているか確認し合いながら話をする様子が見られた。試合中には次の動きの確認が必要になってもゆっくり話し合う時間はないが、経験を通してお互いに歩み寄って目を合わせ、ジェスチャーを交えながら確認し合うことが少しずつ習慣付き、お互いに意思疎通を図りながらプレーできるようになっていった。

さらに、時間のない中でコミュニケーションを取るには表情で伝え合うことも有効であることを経験

を通して学んだ。しかし、生徒の中には喜怒哀楽を表情で表すことが苦手な生徒がいた。試合中、プレーがかみ合わず、確認が必要な場面になっても表情を変えることができなかつたり、点を取って喜び合う時にもなかなか笑顔を作れなかつたりして、仲間に喜びを伝えられなかった。一日の終わりに教師から表情で伝える手段もあることを伝え、まずは少しずつ笑顔でいる時間を増やしていこう、と伝えた。

「初めは意識的に表情を作っていたが、しだいに自然と笑みがこぼれるようになっていき、連合チームを組む相手との距離も縮まっていったように感じた」と生徒は言っていた。コミュニケーションにはノンバーバルな面もあることを学ぶことのできた貴重な機会となり、人と関わることがコミュニケーションスキル向上には欠かせないことを改めて痛感させられた。

4 成果と課題

セルフアドボカシースキルを身に付けるためには、幼いころからの自己理解が大切であり、小学部で聴覚障害や自身の障害の程度への理解を深める学習を積み重ねた経験が中学部以降も生徒の基礎となった。そして、理解を深めた後、校内外で聴者・聴覚障害者関係なく、様々な人を相手に場を設定し、生徒自身の経験を重ねていったことで、生徒は「支援は求めてよいものだ」と感じる事ができた。また、集団で聞こえにくさを話題にすることでお互いが理解者となり、「聞こえないからできない」という消極的な姿から、「自分にできることを積極的にしよう」とする姿も見られるようになった。

障害受容、障害理解について授業で扱ったり、生徒の考えを引き出したりしてお互いに共有していくことはとてもナイーヴな活動となる。児童生徒の発達段階に個人差もあり、何より指導する教師との信頼関係がないと踏み込んだ話はできない。困り感[®]（注1）を感じていると言うことは生徒が葛藤し、悩んでいるということの現れである。だからこそ、指導にあたる教師と生徒が丁寧に関係づくりをしてから指導にあたるということが大前提になるといえる。また、各聾学校で教師の異動・退職もある中、

学校・学部として一貫した指導ができるようにするためには教師の研修の機会を設けたり、教員間で共通理解を図ったりすることができるよう、カリキュラムを作っていくことが今後の課題として挙げられた。また、家庭との連携も必要不可欠である。保護者・本人と対話を重ねながら、保護者にも本人の選択を尊重してもらう姿勢を求めていくことも中学生を指導する上では重要であると考ええる。

今回、小学部・中学部での継続性のある指導や引継ぎの方法についても実践を重ねながら検討した。小学部・中学部で情報交換をすることで、生徒の障害理解や受容の程度が分かり、指導内容の組み立てがしやすくなった。その結果、個々にあった指導を開始することができ、障害理解・受容の変化にも気付くことができるようになった。今後は、中学部卒業後の卒業生のコミュニケーション手段の移行やアイデンティティの確立にも焦点をあて、高等部とも連携を取りながらアフターフォローをしていくことが必要になっていくと考える。

本校は国内で唯一の国立の聴覚特別支援学校である。その特性を生かし、他校だけでなく、大学や支援機関とも連携を図りながら最新の情報を収集し、最新の技術も積極的に活用していくことが課題である。社会に出ると、聴覚を活用し、発語も明瞭な生徒ほど、支援が必要であると気付かれにくい。だからこそ必要な支援を自分で言葉にし、伝える経験を重ねることが大切であると考ええる。これからは教師が場を設定し、児童生徒のセルフアドボカシースキルの向上を図ることが課題である。

（注1）学研の商標登録

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

中川尚志（2022）よりよいコミュニケーションのための聞こえのワークブック．梓書院。